



子どもの心の健康講座 ②3

子育ての歴史3

育児のありようは、社会環境の変化、人々の意識の変化などに伴い急激に変化していきます。今回は、戦後から現在につながる子育ての流れについて見ていきましょう。「参考文献：滝川一廣「子どものための精神医学」医学書院、2017／森山茂樹・中江和恵「日本子ども史」平凡社、2002」

戦後の教育改革では中学校が義務教育化され、15歳までの全員が被扶養者（子ども）とされるようになり、労働から解放されて、子どもでも「期間」が伸びました。さらに、工業社会に必要な知識技術を身につけるため、高校が次々と新設されました。高度成長の担い手である多くのサラリーマンは、子どもに残すべき資産も家業も、伝えるべき職人技術もなく、目に見えて子に与えられるものは「学歴」となりました。そこで、多くの家庭において子育てと教育が緊密につながるようになりました。このため、子育てには多くのエネルギーとお金を要するようになりました。

また、戦争という最大規模の公的事業によって辛酸をなめた親世代が、私的な生活再建に賭けたこともあるでしょう。母子間のつながりの意識が強くなり、子育てが手厚くなりまりましたが、これは民法改正により父親が扶養の義務を負う家長制が廃止され、戦後復興と高度成長のため労働に励む父親に代わり、子育てがもっぱら母親の手に委ねられたことも一因でした。少数の子に手をかけて育て上げるのが一般的になり、70年代初頭から出生率は低下に向かいました。

70年代には、国民の大多数が中流であるという意識とともにする「一億総中流社会」が生まれ、80年代には小売り業やサービス業、情報通信業などの第3次産業（消費産業）がメインとなる高度消費社会になりました。60年代までは近所の支え合いが庶民の暮らしの一部をなし、子ども達は路地裏や空き地といった地域の空間で異年齢の集団を作りだして遊び、社会体験を積んでいました。それが、高度成長が進むことで豊かになり、消費産業によって個人の欲望が煽られることと相まって「個人」の意識が強まりました。土地は管理され、



車社会となり、安全に自由に遊べる空間もなくなっていき、自然な近隣づきあいは縮小しました。社会全体で行っていた子育ては、親の個人的な営みになり、自由度は高いものの、子育てのほぼ全てが親の肩に掛かり、社会から孤立しがちになりました。

教育では、工業化がすすむ高度成長期までは学校で身につける勉学や集団規律、勤労さは、そのまま卒業後の労働につながりました。このため学校へ行くことの大切さは自明でした。80年代に入ると、消費産業が中心となったため、学校で学ぶ内容や集団の規律が仕事に直結しにくくなり、高卒の価値も下がって、学業の価値や意義が揺らいできました。親たちが子どもの個性に合った教育を求める動きと、社会的に共有されるべき知識を教え集団の共同体験を与えることで子どもを社会的な存在（社会人）へと導く「社会化」を目的とした公教育制度の間の矛盾も深まりました。子ども達が社会的な体験をできる場所は学校の他には少なくなり、矛盾と困難を抱えつつ子育てと学校教育がつながっているのです。

穏やかに子が育つ現代

現代の日本では、新生児・乳児の死亡率が非常に減少しました。例えば、日本では1950（昭和25）年時点の1歳未満の乳児の死亡率は千人のうち60人程度だったのが、2018（平成30）年時点では千人のうち1・9人で、世界でもトップクラスの低さです。

子どもの殺人被害や少年による殺人、非行は激減しており、現代ほど子どもたちが激しい暴力性や攻撃性を示さず、命が守られ穏やかに育っている時代と社会はありません。子どもの犯罪被害や加害、虐待、こころの不調や不登校、いじめ、自殺、貧困などの問題は根深く、社会全体で自分ごととしてとらえ、丁寧に対応すべきですが、データによると、現代の日本の子育てでは、多くの子どもたちが安全に健やかに穏やかに育て上げられているとも言えるでしょう。

児童精神科医
北畑 歩